

陶淵明詠史詩試論

——詠史詩における「伝体」とその特色——

宇賀神 秀一

はじめに

現在においてもなお看過出来ない価値を有する何焯や沈德潜、劉熙載などの発言をみると、詠史詩については概ね二つに分けて捉える傾向がある。すなわち、表現対象の歴史人物の事跡を概括的にうたつていくものと、故事や歴史人物に借りて自己の胸中を吐露するものである。こういった詠史詩を二つに分けて捉える観点は、近年の詠史詩研究においてもみられはするが、まだまだ示唆的段階に止まっている。もとより詩歌作品を類型化するという試みは、あくまでもその表層を捉えたものに過ぎない。だが、類型的な表現様式を踏まえてこそ、個々の継承関係や表現の独自性がより明瞭に浮かび上がってくるであろうことも言を俟たない。

本稿の最終的な目標は、詠史詩を二つに分けて捉える観点から、陶淵明の詠史詩についても捉え直し、さらに淵明詩全体の歴史を題材とするうたと比較検討していくことにある。本稿では、その手始めとして詠史詩に対する清朝諸家の見解、及び近年の研究成果を纏めることから始める。その上で淵明の詠史詩における歴史人物の事跡が概括的にうたわれる作品に限定して検討を加え、その特色を明らかにしたい。

一

詠史詩を二つに分けて捉える見解は、何焯『義門讀書記』卷四十六にみられる。そこでは「詠史者、不過美其事而詠嘆之、隱括本伝、不加藻飾、此正体也。太冲多據胸臆、乃又其变也（詠史とは、其の事を美して之を詠嘆するに過ぎず、本伝を隱括し、藻飾を加えざるは、此れ正体なり。太冲は多く胸臆を據ぶ、乃ち又其の变なり）」と述べられている。何氏は詠史詩を「正体」と「其变」に分けて捉えており、「正体」については歴史人物の事跡を称えて詠嘆し、本伝を概括して、飾り立てないものとする。このような詠史詩の源流に当たるのは、次に挙げる班固の「詠史」詩である。

三王徳弥薄 三王の徳 弥いよ薄く

02 惟後用肉刑 惟の後 肉刑を用う

太倉令有罪 太倉の令罪有り

04 就逮長安城 逮に就く 長安の城

自恨身無子 自ら恨む 身に子無く

06 困急独煢煢 困急して独り煢煢たり

小女痛父言 小女 父の言を痛む

08 死者不可生 死者 生くるべからず

上書詣闕下 上書して闕下に詣り

10 思古歌鷄鳴 古を思いて鷄鳴を歌う

憂心摧折裂 憂心 摧けて折裂し

12 晨風揚激声 晨風 激声を揚ぐ

聖漢孝文帝 聖漢の孝文帝

14 惻然感至情 惻然として至情に感ず

百男何憤憤 百男 何ぞ憤憤たる

16 不如一緹縶 一緹縶に如かず

(『古詩紀』卷三)

『漢書』刑法志に拠ると、斉の太倉長の淳于意は罪を得て長安に送られることとなった。その際、意は娘らに男児を産まなかつたことを後悔していると告げる。その言に心を傷めた五女の緹縶は、長安に向かい孝文帝に上書して父の罪を我が身に代えて許しを請う。天子は緹縶の行動に感動を覚え、これを機に肉刑を廃止するにまで至った。市川桃子氏がこのうたを評して、「全体としては、史書の記載を五言に直して簡潔に述べたもの、という感じはまぬがれない」と述べるように、班固自身の獨創性は希薄であるが、史実に依拠しながら韻文として概括していくのは、いかにも史家たる班固らしい表現態度と看做すことが出来る。また、興膳宏氏が「班固は恐らくこの一首の中に、時の過酷な刑罰に対する諷諭を籠めているのであろうが、それはあくまでも隱微な底流として感知されるにとどまり、彼の自己主張が露わに示されることはない」と述べるように、作中において社会的批判の辞句が明示されている訳ではないが、班固が緹縶を取り上げ、それを称賛していることそれ自体に、班固が時勢の嚴罰を間接的に批判しているものと推察させるのである。

次に何氏が「其変」と称する左思の「詠史」詩其二を確認すると次のようにうたわれている。

鬱鬱澗底松 鬱鬱たり 澗底の松

02 離離山上苗 離離たり 山上の苗

以彼径寸莖 彼の径寸の莖を以て

04 蔭此百尺条 此の百尺の条を蔭う

世胄躡高位 世胄 高位を躡み

06 英俊沈下僚 英俊 下僚に沈む

地勢使之然 地勢 之をして然らしむ

08 由来非一朝 由来 一朝に非ず

金張籍旧業 金張 旧業に籍り

10 七葉珥漢貂 七葉 漢貂に珥う

馮公豈不偉 馮公 豈に偉からず

12 白首不見招 白首まで招されず

（『文選』卷二十一）

諸家が指摘するように、谷底に鬱蒼と茂る「松」は左思自身を、山頂に生える「苗」は世襲の貴族官僚を喩えている。その「苗」は、一寸足らずの脆弱な「莖」であるにも拘わらず、「山上」ないし政界に蔓延し、それは「百尺」にも及ぶ「条」を備える「松」、そして、「英俊」を覆い隠している。第九句の「金張」は、漢代の有力者の金

日磾と張湯のことであり、彼らの子孫はたとえ無能であったとしても、門閥社会においては容易に官僚となり得る。それに対して第十一句において、さらにもう一人挙げられる馮唐は、有能であるにも拘わらず、それに相応しい処遇を受けなかった。左思が「詠史」詩として「金張」や「馮公」を挙げたのは、左思の時代の無能な貴族官僚を「金張」の子孫らに比擬し、左思自身の不遇と有能さを「馮公」に比擬して、その憤懣やるかたない胸中を表すためであろう。

さて、一見して明らかのように、左思は班固と同様に「詠史」と題しつつも、班固のように特定の歴史人物の事跡を辿ることはしない。何氏が左思詩を評して「多據胸臆」と述べるのは、左思自身の憤懣が顕わに露呈されていることに拠る。もっとも何氏の発言において、「此正体也。太沖多據胸臆、乃又其変也」と述べて、左思の「詠史」詩が班固の「正体」のごとき「詠史」詩から、「変」化したものとするのは疑問視せざるを得ない。この点については先に引用した興膳氏が、左思の先輩詩人らにおいて、たとえ「詠史」詩と題せずとも、様々な歴史人物にかこつけて自己の胸中を吐露していく作品が多数みられることから、左思「詠史」詩の淵源を班固のそれのみに限定することは、近視眼的であると説く通りであろう。

袁枚『随園詩話』卷十四をみると次のように述べられている。

詠史有三体。一借古人往事、抒自己懷抱、左太沖之「詠史」是也。一為隱括其事、而以詠嘆出之、張景陽之「詠二疏」、廬子諒之「詠蘭生」是也。一取對仗之巧、義山之「牽牛」對「駐馬」、韋莊之「無忌」對「莫愁」是也（詠史に三体有り。一に古人往事に借りて、自己の懷抱を抒ぶ、左太沖の「詠史」は是れなり。一に為に其の事を隱括し、以て詠嘆して之を出だす、張景陽の「詠二疏」、廬子諒の「詠蘭生」は是れなり。一に對仗

の巧を取る、義山の「牽牛」に「駐馬」を対にし、韋莊の「無忌」に「莫愁」を対にするは是れなり^三。

袁氏は詠史詩を三つに分けて捉えており、第一に左思詩のごとく、古人・往事にかこつけて自己の胸中を吐露するものとし、第二に張協「詠史」詩、廬諶「覽古」詩のごとく、疎広・疎受などの特定の人物の事跡を概括し、それに詠嘆するものとする。この二つについては、何氏のいわゆる「正体」の「其事而詠嘆之、隱括本伝」や「其変」の「多據胸臆」という見解と殆ど変わるものではない。しかも三つ目に挙げた李商隱の「馬嵬」詩二首其二などにしても、楊潔瓊・許華偉氏が「袁枚所說的第三体、實際只是談写作技巧（袁枚の説くところの第三のスタイルについては、實際、ただ技巧性について論じたものに過ぎない^三）」と説くように、対句技巧に注目して言及していることからすれば、詠史詩それ自体に着眼した見解とは看做し難い。ただし、袁氏は、何氏のように詠史詩の源流には拘っておらず、詠史詩のスタイルの相違として分けている点は留意することにした。

なお、沈徳潜は『古詩源』巻七のなかで、「太沖詠史、不必專詠一人、專詠一事、詠古人而已之性情俱見、此千秋絶唱也。後惟明遠、太白能之（太沖の詠史は、必ずしも専ら一人を詠じ、専ら一事を詠ぜず、古人を詠じて己の性情俱に見わる、此れ千秋の絶唱なり。後に惟だ明遠・太白のみ之を能くす^三）」と述べており、これは明らかに「一人一事」を対象とする班固などの詠史詩と比較して、左思のそれを「千秋絶唱」と賞賛している。沈氏の見解において、左思の詠史詩の特徴を述べたのは的確であるが、そもそも詠史詩を二つに分けて捉えるべきだとすれば、それとの対比で作品の良し悪しまで言及するのは、些か公平さを欠く。もとより「一人一事」を表現対象とする詠史詩の作者が、自己の「性情」を直接的に表すことを主眼に据えていたとは考え難いのではないだろうか。さらにまた劉熙載は『芸概』詩概篇において、「左太沖『詠史』似論体、顔延年『五君詠』似伝体（左太沖の『詠史』は

論体に似て、顔延年の『五君詠』は伝体に似る」と説いて、左思詩を「論体」と称し、顔延之の「五君詠」詩を「伝体」と称している。次に挙げよう。

阮公雖淪跡 阮公跡を淪すと雖も

02 識密鑑亦洞 識は密やかにして鑑も亦た洞し

沈酔似埋照 沈酔 照を埋むるに似て

04 寓辞類託諷 寓辞 託諷に類す

長嘯若懷人 長嘯して人を懷うが若く

06 越礼自驚衆 礼を越えて自ら衆を驚かす

物故不可論 物故は論ずべからず

08 途窮能無慟 途窮まれば能く慟むこと無からん

(『文選』卷二十一)

『宋書』顔延年伝に拠ると、顔延之はかねてから劉湛や殷景仁らが要職を占めていることが気に食わず、劉湛に向かつて、自分が出世しないのは貴様の小間使いだつたせいだと述べた。こうした非礼を切つ掛けとして、顔延之は永嘉太守に左遷され、「五君詠」詩を製作するに至つたとされる¹¹⁰⁾。

劉氏のいわゆる「伝体」のこのうたでは、第三句の「沈酔」が、李善引くところの臧栄緒『晋書』に「籍拜東平相、不以政事為務、沈酔日多（籍 東平相に拜せられるも、政事を以て務めと為さず、沈酔すること日びに多し）」とみえ、末句についても『魏氏春秋』に「籍時率意独駕、不由径路、車跡所窮、輒慟哭而返（籍時に率意に

独り駕して、径路に由らず、車跡の窮まる所あれば、輒ち慟哭して返る」とあるのを踏まえている。従って、顔延之の「五君詠」詩は、左思のごとく自己の胸中を直接的に吐露するものではない。班固の作と同じように歴史人物の事跡が概括的にうたわれている。だが、「五君詠」詩に顔延之の鬱屈した情がみとれようこと、このうたを読んだ劉湛と義康から、「以其辞旨不遜、大怒（其の辞旨の不遜なるを以て、大いに怒る）」と激昂を買ったことから窺える。

以上を踏まえて楊潔瓊・許華偉氏の詠史詩の説明をみてみることにしたい。

詠史詩的基本構成は叙事和抒情、二者的側重点不同、是詠史詩論體、伝体之分的依据。這樣、「隱括本伝、不加藻飾」一類、我們可称之為伝体。這一体式、叙事大於抒情。注重对史伝内容進行剪裁、一般是一人一事。詩人思想感情、議論褒貶只寓於叙事・詠嘆中、一般不直接表露。而「直據胸臆」一類、我們可称之為論体。這一体式、抒情成分大於叙事、叙述史実而不拘於一人一事、注重的借古人古事抒發自我感慨和懷抱（詠史詩的基本的な構成は叙事と抒情であり、二者の重点とするところの違いが、詠史詩における論体と伝体の分け方の根拠である。「何焯のいわゆる」「隱括本伝、不加藻飾」の類については、伝体と称し得る。このスタイルでは叙事性が抒情性よりも強い。伝記を取捨選択することを重視しており、大体は一人一事を扱う。詩人の思想・感情、議論・褒貶はただ叙事・詠嘆に託されており、大体は直接的に感情を明かにすることはしない。そして「何焯のいわゆる」「直據胸臆」の類については、論体と称し得る。このスタイルにおいては抒情性が叙事性よりも強く、史実を叙述するにしても一人一事に拘らず、古人・古事にかこつけて自己の感慨・抱負を表すことを重視している。

両氏のいうように、班固や顔延之などの伝体の詠史詩は、歴史の一人一事を対象として、その事跡が概括的にうたわれており、自己の感慨を端的に詠嘆し、自己の主張するところは甚だ暗示的である。一方で左思の論体の詠史詩は、一人一事に拘らず、自己の抱負や憤懣がより直接的にうたわれている。

以上、先学の詠史詩を二つに分けて捉える見解を確認した。本稿では、これを踏まえて陶淵明の詠史詩について検討を加えていく。淵明の詠史詩には、楊潔瓊・許華偉氏らのいわゆる伝体と論体の両者がいずれもみられるが、本稿では、班固を源流とし、とりわけ長い伝統を有する伝体の詠史詩に注目していく。

二

陶淵明の伝体の詠史詩は、「詠一疏^一」詩、「詠荆軻」詩、「詠三良」詩である。「詠史」の定義は、『文選』卷二十一の詠史、王粲「詠史」詩の題下の呂向注に次のようにみられる。

謂覽史書、詠其行事得失、或自寄情焉（史書を覽て、其の行事得失を詠じ、或いは自ら情を寄するを謂うなり）。

呂向は、史書を閲覽し、その行事得失を詠じるものや、みずからの感慨を寄せるものとする。この定義は分かり易いものであり、十分に首肯されるものである。ただ、このような観点からすれば、淵明詩においては「飲酒」詩

其二や「擬古」詩其二なども充分に「詠史」の要件を満たしている。つまり、「詠史」の定義は曖昧とならざるを得ないのであるが、本稿において当該三首を「詠史」として拘ったのは、その詩題に「詠」字を含んでおり、しかも「二疏」「荆軻」「三良」とあるように、淵明の歴史人物を対象化する意図が明確に示されているためである。それではまず淵明の「詠二疏」詩からみていくことにしたい。

大象転四時 大象は四時を転じ

02 功成者自去 功成る者は自ら去る

借問袁周来 借問す 袁周より来

04 幾人得其趣 幾人か其の趣を得たると

游目漢廷中 游目す 漢廷の中

06 二疏復此举 二疏 復た此の举あり

高嘯返旧居 高嘯して旧居に返り

08 長揖儲君傳 長揖す 儲君の傳

餞送傾皇朝 餞送 皇朝を傾け

10 華軒盈道路 華軒 道路に盈つ

離別情所悲 離別 情の悲しむ所なるも

12 餘榮何足顧 餘榮 何ぞ顧みるに足らんや

事勝感行人 事の勝れるは行人を感ぜしめ

14 賢哉豈常譽 賢なるかな とは豈に常譽にならんや

厭厭閭里歎 厭厭たり閭里の歎

16 所嘗非近務 嘗む所は近き務めに非ず

促席延故老 席を促して故老を延まき

18 揮觴道平素 觴を揮いて平素を道うう

問金終寄心 金を問いて終りにまで心を寄するも

20 清言曉未悟 清言もて未だ悟らざるを曉さとす

放意樂餘年 意を放ちて餘年を楽しみ

22 邊恤身後慮 身後の慮を恤うれうるに違あらんや

誰云其人亡 誰か云う其の人亡ぶと

24 久而道弥著 久しくして道い弥よ著かなり

既に先学が指摘するように、淵明「詠二疏」詩は、概ね『漢書』疏広伝に依拠してうたわれている。二疏の事跡について『漢書』疏広伝に拠りながら、その概要を三つに分けてみると、①疏広、字は仲翁は、若くして学問を好み、召されて博士・太中大夫に拝せられ、皇太子が立つてより太傅となる。彼の兄の子受は賢良の科に挙げられて、後に少傅に拝せられる。②在職して五年ばかり、広は受に向けて退任の意志を告げ、受もこれに従う。退任する際には朝廷を挙げて宴席が開かれた。③帰郷して後、日々に豪勢な酒宴を開き、子孫には争いや墮落の元となる財産を残さないようにした。

以上の二疏の事跡と淵明「詠二疏」詩における二疏の事跡を比較してみると、淵明は第五句から十四句において二疏の退任の様子を、第十五句から二十二句においては彼らの故郷での暮らし振りをうたっている。このことから淵明の二疏の事跡に対する関心は、とりわけ②と③にあることが窺える。また、淵明に先行して二疏を表現対象とした張協「詠史」詩がある。ここで問題としたいのは、②の一幕の張協と淵明の二疏の事跡に対する概括の仕方である。まずは『漢書』疏広伝の次の一文をみてみよう。

公卿・大夫・故人・邑子設祖道、供張東都門外、送者車數百兩、辭決而去。及道路觀者皆曰、賢哉二大夫。或歎息為之下泣（公卿・大夫・故人・邑子は祖道を設けて、供を東都門外に張り、送者の車は數百兩、辭決して去る。道路に及んで觀る者は皆な曰く、賢なるかな二大夫、と。或るひとは歎息して之が為に下泣す）。

公卿・大夫・友人・郷里の人々は送別の道を設け、帳を長安の東都門、及びその外側にまで張り、送別するものは數百人に及び、誰しもが「賢哉二大夫」と稱賛し、あるものは涙を禁じ得なかったことが記されている。この一幕について、張協と淵明は次のようにうたっている。

朱軒曜金城 朱軒 金城を曜し

06 供帳臨長衢 供帳 長衢に臨む

（『文選』卷二十一、張協「詠史」、全二十句）

餞送傾皇朝 餞送 皇朝を傾け

10 華軒盈道路 華軒 道路に盈つ

(陶淵明「詠二疏」)

先に挙げた張協は第三・四句において、公卿達が長安の立派な「東都門」に集まって、「祖二疏（二疏に祖けせり）」とうたつた上で、多くの朱塗りの車が集まった「金城」を起点に、帳が街を貫く道の両脇に張り巡らされるものとして、長安一体の煌びやかな様子がうたわれている。それに対して淵明は、二疏の送別のために「皇朝」の公卿達が「傾」、すなわちこぞ出て行き、それ故に「道路」に人々が「盈」ち溢れるものとして、盛り上がるようなイメージでうたっている。張協と淵明は、いずれも二疏の送別の一幕に注目し、いずれも対偶表現が採られている。淵明が表現対象を二疏とする点において張協に影響を受けたとすれば、淵明は張協に対する挑戦として、このように表現したものと捉えられる。

なお、井上一之氏は③の一幕の「放意樂餘年、遑恤身後慮」（第二十一・二十二句）に注目し、残された人生を意のままに楽しみ、自分の死後まで煩うことがあるかというのと、『漢書』における二疏が子孫に対して「吾豈老詩不念子孫哉（吾れ豈に老詩して子孫を念わざるか）」と告げて、子孫の墮落を深刻に懸念したからこそ、財産を揮ったのが相違するものと指摘している。井上氏はこの相違について、「本詩執筆の直接の動機は、二疏が『揮金』したことにあり、淵明はこれを『家族のためでなく、自分のために餘生を楽しむ』ことと解釈し²¹⁾たものと結論づけた。またこれが淵明自身の志向に連なったものであることを説いている。井上氏の指摘に拠りつつ、淵明詩における「揮金」の志向がうたわれる一例を挙げれば、次の通りである。

傾家持作樂 家を傾けて持して楽しみを作し

10 竟此歲月駛 此の歳月の駛するを竟えん

有子不留金 子有るも金を留めず

12 何用身後置 何ぞ用いん 身後の置を

(「雑詩」其六、全十二句)

淵明が「家」を「傾」けてまで、財産を惜しみなく使うのは、走り去っていく一回限りの人生においてこそ歓娛を尽くすためである。それ故に、自己の死後のことまで気遣わず、子孫のために財産を残さないのである。つまり、『漢書』における二疏は子孫のために財産を揮ったのに対し、淵明詩における二疏は自己のために財産を尽くしたものとして、淵明自身の志向に引きつけながら表現されていることが分かる。

続けて淵明の「詠荊軻」詩を挙げれば次の通りである。

燕丹善養士 燕丹は善く士を養う

02 志在報強嬴 志は強嬴に報ゆるに在り

招集百夫良 百夫の良を招集し

04 歳暮得荊卿 歳暮に荊卿を得たり

君子死知己 君子は己を知るものに死す

06 提劍出燕京 劍を提げて燕京を出づ

素驥鳴広陌 素驥 広陌に鳴き

08 慷慨送我行 慷慨して我が行を送る

雄髮指危冠 雄髮危冠を指し

10 猛氣衝長纓 猛氣長纓を衝く

飲餞易水上 飲餞す易水の上

12 四座列群英 四座群英を列ぬ

漸離擊悲筑 漸離悲筑を撃ち

14 宋意唱高声 宋意高声を唱う

蕭蕭哀風逝 蕭蕭として哀風逝き

16 淡淡寒波生 淡淡として寒波生ず

商音更流涕 商音更ごも流涕し

18 羽奏壯士驚 羽奏壯士驚く

心知去不帰 心に知る去りて帰らざるも

20 且有後世名 且つは後世の名有らんと

登車何時顧 車に登りて何れの時にか顧みん

22 飛蓋入秦庭 蓋を飛ばして秦庭に入る

凌厲越万里 凌厲として万里を越え

24 逶迤過千城 逶迤として千城を過ぐ

凶窮事自至 凶窮まりて事自ら至る

26 豪主正怔營 豪主正に怔營たり

惜哉劍術疏 惜しいかな 劍術疏にして

28 奇功遂不成 奇功 遂に成らず

其人雖已没 其の人 已に没すと雖も

30 千載有餘情 千載に餘情あり

荆軻の事跡について『史記』刺客列伝に拠りつつ、その概要を大きく四つに分けてみると、①荆軻は、衛の出身で若くして文武をよくし、邯鄲などを旅しながら燕に移り住んだ。犬殺しであり、筑の名手でもある高漸離と親交を結ぶ。この頃、燕の太子丹が秦から逃亡し、帰国する。丹は嬴政に恨みを抱きつつも、六国を撃破した秦に太刀打ち出来ずにおり、加えて秦の樊將軍が燕に亡命してくる。これに頭を抱えた丹は、田光先生に相談したところ、荆軻が推薦された。②丹は荆軻に謙って、政への報復を頼み込む。それを引き受けた荆軻は、樊將軍の首と燕の地図を持参して、政の信頼を得る計画を立て、鋭利な匕首を手に入れ、政への報復の準備を整える。③友を待っていた荆軻に対し、丹は出立を急かす。荆軻は丹に激怒しつつも、出立を決める。彼は白装束に身を包んだ賓客、漸離らに易水のほとりに見送られ、秦に旅立った。④荆軻は秦に至り、政に接見する機会を得る。政に樊將軍の首を捧げ、燕の地図を開きつつ、匕首を突き付けるも、事は失敗に終わる。

さて、淵明「詠荆軻」詩では第五句から第二十四句において、荆軻の出立から壮行的一幕がうたわれており、このことからすれば淵明の荆軻の事跡に対する関心は、③に集約していることが窺える。②の嬴政刺殺の算段、④の嬴政暗殺的一幕などに至っても、その関心は希薄である。また、③の一幕をうたった「雄髮指危冠」(第九句)は、明らかに『史記』刺客列伝の「髮尽上指冠(髮は尽く上りて冠を指す)」を踏まえており、「漸離擊悲筑」(第十三

句)なども、同伝の「高漸離擊筑(高漸離は筑を撃つ)」を踏まえ、また淵明に先行して荊軻を表現対象としている阮瑀「詠史」詩においても次のようにみられるものである。

漸離擊筑歌 漸離 筑を撃ちて歌い

08 悲声感路人 悲声 路人を感ぜしむ

(全十句)

淵明が『史記』における「筑」を「悲筑」とした点には、淵明の抱く漸離の悲愴なイメージが窺えるものであるが、恐らくは阮瑀詩における漸離の「悲声」に影響を受けてのことであろう。このように淵明の「詠荊軻」詩は『史記』や阮瑀「詠史」詩の語彙を直接的に踏まえているのであって、その発想は必ずしも新奇とはいえない。さらにまた第二十七句において「惜哉劍術疏」とうたって、荊軻に対する感慨を述べるにしても、同伝において魯句踐が「惜哉其不講於刺劍之術也(惜しいかな 其の刺劍の術を講ぜざるや)」というのと殆ど変わるものでない。

しかし、その一方で③的一幕において「心知去不帰、且有後世名」(第十九・二十句)として、荊軻自身の「心」情描写にまで及んでいるのは、淵明の独創と看做すことが出来る。もとより「有後世名」は、『史記』においても司馬遷が「自曹沫至荊軻五人……不欺其志、名垂後世、豈妄也哉(曹沫より荊軻の五人に至るまで……其の志を欺かず、名を後世に垂る、豈に妄ならんかな)」と称するのと発想を同じくしようが、淵明の場合は、荊軻自身が不朽の名声の獲得を期していたものとうたっているのである。

そして、先の淵明「詠二疏」詩における二疏は、部分的に『漢書』の二疏と相違しつつ、淵明自身の志向がうたわれたものであった。それと同様に、淵明「詠荊軻」詩にうたわれる不朽の名声への志向は、ほかの淵明詩におい

ても次のようにみられる。

九十行帯索 九十にして行きて素を帯にし

06 飢寒況当年 飢寒 当年に況うるも

不頼固窮節 固窮の節に頼らずんば

08 百世当誰伝 百世 当^はた誰か伝えん

(「飲酒」其二、全八句)

生有高世名 生きては世に高き名有り

10 既没伝無窮 既に没しては無窮に伝わる

不学狂馳子 学ばざるかな 狂馳の子

12 直在百年中 直だ百年の中に在るのみなるを

(「擬古」其二、全十二句)

「飲酒」詩其二では、「固窮節」をよりどころとして、「百世」に名を伝えんこと、「擬古」詩其二では、二君に仕える潔しとしなかつた田子泰、字は田疇の「窮」まること「無」い名声の獲得を称えており、それとは異なる「狂馳子」が目先の「百年中」に囚われていることを批判的にうたっている。従って、淵明が「詠荆軻」詩において、荆軻自身の心情描写として「有後世名」とうたっているのは、その実、淵明自身の志向を荆軻に代弁させているものと看做すことが出来る。

なお、「詠荆軻」詩においても、「詠二疏」詩と同じように技巧的表現がみられる。

凌厲越万里 凌厲として万里を越え

24 透迤過千城 透迤として千城を過ぐ

「凌厲」は激しく勢いのある様の双声語で、「透迤」はうねうねと曲がりくねった様の疊韻語である。こういった双声疊韻語を対偶とするのは、高木正一氏の調査に拠れば、陸機の得意とするところであり、淵明のやや後輩に当たる謝靈運などの詩人に頻用されたものである。そうだとすれば、淵明「詠荊軻」詩における当該一聯もそういった美文志向の時代の風潮に合致した対偶表現と看做すことが出来る。しかしながら、その下においては、殆ど同義の「越」字と「過」字を対偶の関係とし、「万里」「千城」を対偶としていわゆる数対を作っており、これは建安詩人や左思などの無骨な力強さをも有している。

このように淵明「詠二疏」詩や「詠荊軻」詩において技巧的表現がみられるのは、淵明が歴史人物の事跡を、より詩的に構築しているものとして捉えているものと捉えてよいだろう。伝体の詠史詩は、史実に依拠するばかりで、叙情性が希薄であることから、批判的に捉えられることもあった。改めていえば、沈德潜が「太沖詠史、不必專詠一人、專詠一事、詠古人而已之性情俱見、此千秋絕唱也」と述べるのは、伝体の詠史詩との比較において左思「詠史」詩を絶賛するものである。確かに、淵明のそれも、「一人一事」を対象としており、史実に依拠して、歴史人物の事跡を概括的に表現しているという点において叙事的ではある。だが、淵明の場合は、叙情よりも寧ろ歴史人物の事跡をいかに叙事していくかという点に関心が窺えるのである。加えて、淵明自身の「性情」は、歴史人物に代弁させることで顕れている。

三

最後に淵明の「詠三良」詩をみていく。淵明に先行して三良を表現対象とした詩人に、阮瑀や王粲、曹植らがいるのは周知のことに属していよう。丁福保氏は次のように述べている。

班固詠史、摛事直書、特開子建・仲宜詠三良一派（班固の詠史は、事に摛つて直書す、特に子建・仲宜の詠三良の一派を開けり^は）。

丁氏は、王粲と曹植の「詠三良」の一派は、班固「詠史」詩の流れを汲み、史実に依拠して、そのまま記すものとしている。この発言は、何焯が詠史詩の「正体」の特徴として、本伝を概括して、飾り立てないものとする見解に影響を受けたものであろう。もっとも三良の事跡の纏まった資料はみられず、史実に依拠しているのか厳密には不明である^も。従つて、淵明「詠三良」詩についても史実との比較は試み難いのであるが、少なくとも王粲らの詠史詩の流れを汲むものとして、彼らの影響を受けているであろうことは間違いない。また、従来の淵明「詠三良」詩の研究では、晋宋革命の実際と照合するものが中心であるが^も、本稿では淵明「詠三良」詩における先輩詩人達からの継承のあり方^も、とりわけ曹植からの影響が窺えることを明らかにすることにしたい。

そもそも王粲「詠史」詩と曹植「三良」詩には顕著な相違をみる事が出来、これは従来の研究においてしばしば指摘されるところである^も。まずは王粲「詠史」詩の冒頭四句を確認すると次のようにうたわれている。

自古無殉死 古より死に殉うこと無し

02 達人共所知 達人共に知れる所なり

秦穆殺三良 秦穆 三良を殺す

04 惜哉空爾為 惜しいかな 空しく爾為せり

〔文選〕卷二十一、全二十句

「古」から殉死の規定はないにも拘わらず、穆公が三良を死に殉わしめたものとして、穆公が批判的にうたわれている。これは、次に挙げる『毛詩』秦風「黄鳥」篇に冠せられた小序の穆公批判に合致したものとされる。

黄鳥、哀三良也。国人刺穆公以人従死、而作是詩也（黄鳥は、三良を哀れむなり。国人穆公の人を以て死に従わしむるを刺る、而して是の詩を作るなり）。

秦の民衆が、穆公の三良を殉死させたこと、それを刺るものとして説かれおり、これに対応する『春秋左氏伝』文公六年には次のようにみられる。

秦伯任好卒、以子車氏之三子、奄息・仲行・鍼虎為殉、皆秦之良也。国人哀之、為之賦「黄鳥」。君子曰、秦穆之不為盟主也宜哉。死而棄民。先王違世、猶詒之法、而況奪之善人乎（秦伯任好卒す、子車氏の三子奄息・仲行・鍼虎を以て為に殉せしむ、皆な秦の良なり。国人之を哀しみて、之が為に「黄鳥」を賦す。君子曰く、秦穆の盟主為らざるや宜なるかな。死して民を棄つ。先王は世を違りて、猶お之に法を詒す、況んや之が善人

を奪わんや)。

穆公が覇業をなし得なかったのは、民衆を捨て去って、善人を奪い去ったからという。一方で曹植「三良」詩では次のようにうたわれている。

功名不可為 功名為すべからざるも

02 忠義我所安 忠義 我が安んずる所なり

秦穆先下世 秦穆 先に下世して

04 三臣皆自残 三臣 皆な自ら残そこなう

(『文選』卷二十一、全十四句)

「功名」は自己の努力で認められるものではないが、「忠義」を尽くすことこそ、「安」んじ、求めるところであり、穆公が逝去して、三良みずから死を選んだものとうたわれている。何焯が王粲と曹植の詠史詩を評して、「此以秦穆殺三良立論……。子建以三良自殘立論……(此れ秦穆の三良を殺すを以て立論す……)。子建は三良の自ら残うを以て立論す……)」と述べているのは、両者の相違を端的に指摘したものであり、さらに矢田博士氏はより詳細に彼らの詠史詩における殉死の態度の相違を次のように纏めている。

阮瑀の詩に「誤哉秦穆公、身没従三良」とあり、王粲の詩に「秦穆殺三良、惜哉空爾為」とあるように、彼ら二人の死は、いずれも三良を殉死に追いやった秦の穆公を批難することに主眼が置かれている。それに対し

て、曹植の詩では「秦穆先下世、三臣皆自残」とあるように、三良の死を穆公に強要された受動的な死としてではなく、三良自らが選んだ自主的・主体的な死と捉え、三良の忠誠という点に主眼が置かれている。

三良の死が、穆公の死によって導かれたものであることは、阮瑀・王粲・曹植の三者においていずれも変わらない。だが、王粲や阮瑀は穆公が三良の殉死を強要したことの批判として、曹植は穆公が三良の殉死を強要したというよりも、三良自身が主体的に死を選び取ったものとして表現されている。このように穆公を批判的に捉えず、三良自身が主体的に死を選ぶという発想については、たとえば『漢書』匡衡伝に「臣竊考国風之詩……秦穆貴信、而士多從死（臣竊かに国風の詩を考うるに……秦穆 信を貴びて、而して士多く死に従う）」とみえるのや、後に引用する応劭注などにみられる。

以上の王粲や曹植における詠史詩の相違を踏まえて、淵明「詠三良」詩をみてみよう。

彈冠乘通津 冠を弾いて通津に乗ず

02 但懼時我遺 但だ懼る 時の我をば遺さんことを

服勤尽歲月 勤めに服して歳月を尽くす

04 常恐功愈微 常に恐る 功の愈いよ微なるを

忠情謬獲露 忠情 謬りて露わるるを獲

06 遂為君所私 遂に君の私する所と為る

出則陪文輿 出づれば則ち文輿に陪い

- 08 入必侍丹帷 入れば必ず丹帷に侍す
箴規嚮已従 箴規は嚮むかに已に従われ
- 10 計議初無虧 計議は初めより虧くる無し
一朝長逝後 一朝長逝の後
- 12 願言同此帰 願いて言に此の帰を同じうせんとす
厚恩固難忘 厚恩固より忘れ難く
- 14 君命安可違 君命安くんぞ違うべけん
臨穴罔惟疑 穴に臨みて惟れ疑うこと罔し
- 16 投義志攸希 義に投ずるは志の希う攸なり
荊棘籠高墳 荊棘高墳を籠め
- 18 黄鳥声正悲 黄鳥声正に悲し
良人不可贖 良人贖うべからず
- 20 泫然霑我衣 泫然として我が衣を沾す

第一句から四句は隔句対の構造で捉えられ、出仕して以来、ただ時勢に取り残されることを「懼」れ、ひたすら忠勤に務めたのは、功のわずかなることを「恐」れたためである。やがて穆公から、はからずも「忠情」が認められ、かくして寵愛を受けることとなった。第七句から十句も対偶表現として、外に「出」れば、豪華な車に同乗し、朝廷の内に「入」っては、真紅の帳に侍っていたこと、つまり穆公と三良は常に密着し、極めて親密な関係で

あつたことがうたわれている。そして、三良の穆公に対する諫言は、「嚮さよ」に、受け容れられないことは無く、計略は「初」めより穆公の意を満たすものとうたわれており、穆公の三良に対する厚い信頼がみてとれる。

第十四句にいう「君命」は、『漢書』匡衡伝に引かれる応劭注に次のようにみられる。

公曰、生共此樂、死共此哀。於是奄息、仲行、鍼虎許諾（公曰く、生きては此の樂しみを共にし、死なば此の哀しみを共にす、と。是に於いて奄息・仲行・鍼虎は許諾す）。

これは、宴席の場において、穆公から三良に向けて生死を共にしようと発せられたものであり、三良はこれを「許諾」した。このことを踏まえれば、淵明は第十一句から十四句において、三良が穆公の逝去するに及んで、死を共にしようと「願」い、それは穆公から受けた「厚恩」が忘れ難く、どうして生死を共にせんとする「君命」に背くことがあるのか、とうたっている。なお、王粲「詠史」詩では、三良の殉死の態度が次のようにうたわれている。

臨歿要之死 歿するに臨みて之に死を要むれば

06 焉得不相隨 焉んぞ相い随わざるを得ん

穆公が死するに当たって、三良に死を共にしようと求めたならば、どうしてそれに随わないことが出来ようか、として穆公が殉死を強要したものとする。

このように淵明「詠三良」詩は、穆公を批判的に捉えないという点、また死に対する主体性という点において王粲「詠史」詩と相違し、この二点においては曹植「三良」詩に近い。改めて、曹植「三良」詩の残りの箇所をみてみよう。

生時等榮樂 生きし時は榮樂を等しくし

06 既没同憂患 既に没しては憂患を同じくす

誰言捐軀易 誰か言わん 軀を捐つること易しと

08 殺身誠独難 身を殺すこと誠に独り難し

攬涕登君墓 涕を攬いて君が墓に登り

10 臨穴仰天歎 穴に臨みて天を仰ぎて歎く

長夜何冥冥 長夜 何ぞ冥冥たり

12 一往不復還 一たび往けば復た還らず

黃鳥為悲鳴 黃鳥 為に悲鳴す

14 哀哉傷肺肝 哀しいかな 肺肝を傷ましむ

第五・六句は、先に引いた『漢書』の応劭注の「生共此樂、死共此哀」と同じように、生死の「榮樂」「憂患」を共にすることをうたいつつも、それに次いで自己を殺すことの困難さをうたっている。つまり、第一句から四句において、「忠義」を希求し、「自殘」として、主体的に死を選びつつも、第七句以降においては、一転して死に対

する恐れや、躊躇するような情がみてとれるのである。道家春代氏の「作品の前半のはやる気持ちと後半の悲痛な調子との違和感」があるという指摘も確かに首肯される。

また、第九・十句の「攬涕登君墓、臨穴仰天歎」については、大きく二つの解釈が提示されている。第一に、「君」を三良とみて、曹植が三良の墓穴に臨んで嘆いているとするもの、第二は、「君」を穆公とみて、三良が墓穴に臨んで嘆いているとするもの、である。前者は、『詩経』秦風「黄鳥」篇の次の箇所を踏まえた解釈である。

臨其穴 其の穴に臨めば

08 惴惴其慄 惴惴として其れ慄る

彼蒼者天 彼の蒼たる者は天

10 殲我良人 我が良人を殲くせり

(全三章、第一章、章十二句)

「黄鳥」篇において、「穴」に「臨」むのは秦の民衆であり、三良が生き埋めにされた墓を覗き込み、恐れ戦いている。これに即して曹植詩の「攬涕登君墓、臨穴仰天歎」についていえば、曹植が涙を払って三良の「墓」に登り、「臨穴」して、天を仰ぎ、歎いているものと解される。後者の解釈については、「忠義我所安」(第二句)に対して、李善が「我、謂三良也(我は、三良を謂うなり)」と注するがごとく、作中の視点人物を三良として捉えたものである。これに即していえば、三良が「君」たる穆公の「墓」に登り、「臨穴」しつつも、死の間際において天を仰ぎ、歎いているものと捉えられる。

以上を踏まえて淵明「詠三良」詩における「臨穴」の一幕をみると、次のようにうたわれている。

臨穴、罔惟疑 穴に臨みて惟れ疑うこと罔し

16 投義志攸希 義に投ずるは志の希う攸なり

ここにおいて「臨穴」しているのは、既に第二句の「但懼時我遺」において示された三良であり、この点については大立智沙子氏が詳細に検討している。これに従えば、淵明は曹植「三良」詩における「臨穴仰天歎」的一幕を、三良視点として捉えていた可能性が高い。そして、曹植詩の三良が「臨穴」するに及んで、天を仰ぎ、歎いていたのに対し、淵明詩における三良は、「臨穴」するに及んでも、一切迷わなかったものと表現されている。つまり、曹植詩の作中前半における死に対する主体的態度と作中後半の「悲痛な調子」や、その「違和感」は、淵明詩に至って払拭されているものといえる。

いま一度、『詩経』秦風の「黄鳥」篇から淵明「詠三良」詩までの「臨穴」の一幕を列挙し、その変化のあり様を確認してみよう。

臨其穴 其の穴に臨めば

08 惴惴其慄 惴惴として其れ慄る

(『詩経』秦風「黄鳥」)

臨穴呼蒼天 穴に臨みて蒼天を呼び

10 涕下如綆縻 涕の下ること綆縻のごとし

(王粲「詠史」)

攬涕登君墓 涕を攬いて君が墓に登り

10 臨穴仰天歎 穴に臨みて天を仰ぎて歎く

(曹植「三良」)

臨穴罔惟疑 穴に臨みて惟れ疑うこと罔し

16 投義志攸希 義に投ずるは志の希う攸なり

(陶淵明「詠三良」)

「黄鳥」篇は、民衆が「穴」に「臨」んで恐れ戦くものとして、王粲詩では、第七・八句に「妻子当門泣、兄弟哭路垂（妻子門に当たりて泣き、兄弟路の垂にて哭す）」とあるように、「妻子」「兄弟」が哭泣しているのを踏まえれば、彼らが「臨穴」して、「蒼天」に呼び掛け、大綱のような涙を禁じ得なかったものと解される。一方で曹植詩では、曹植自身が三良の墓に、あるいは三良が主君の墓に登り、「臨穴」して天を仰ぎ、悲嘆している。淵明詩に至って、三良は「臨穴」しつつも、一切迷わなかったものとして、それは「義」に殉ずることこそ、「志」の向かうところであるからとうたっている。改めて確認すれば、曹植詩においても「忠義我所安（忠義我が安んずる所なり）」（第二句）とあるように、「義」が敬慕されていたことは明らかである。だが、曹植詩は、そこから自己を殺す困難さに及ぶという点において生への執着が窺えるのであり、それに対して淵明詩では、生よりも「義」が重んじられているのである。ここに、「黄鳥」篇と王粲詩はもとより、曹植詩における三良像とも相違した、淵明独自の三良像がみてとれるのである。

以上を要するに、淵明「詠三良」詩は、王粲「詠史」詩の三良のごとく、穆公を批判的に捉えるものではないし、

受動的な死としてうたわれるのではない。その点において曹植「三良」詩における三良の主體的に死を選んだものに合致し、そういった発想それ自体に新しさがみられるものではない。しかしながら淵明の三良は、曹植のそれよりも「義」を重んじて積極的に死を選んでおり、その点において獨創性が窺えるものといえる。そして、このような発展的な表現態度こそが、淵明「詠三良」詩における曹植「三良」詩の継承のあり方と看做されるのである。

おわりに

本稿では、先学における詠史詩を二つに分けて捉える見解について整理し、淵明の伝体の詠史詩に注目して検討を加えた。伝体の詠史詩は、歴史の一人一事を対象として、その事跡が概括的にうたわれるものであり、淵明の「詠二疏」詩、「詠荆軻」詩、「詠三良」詩は、正史に基づき、あるいは基づくところは不明であっても、おしなべてそういった特徴に合致していると考えられた。ただし、正史との比較において、淵明自身の歴史人物の事跡に対する関心は、それぞれ特色的に窺えるものといえる。つまり、淵明の歴史人物に対する志向は、彼らの事跡を選択し、表現していくなかに端的に示されているのである。

また、従来、伝体の詠史詩は史実に依拠するばかりで、叙情性が希薄であるということから批判的に捉えられることもあった。確かに淵明のそれも基本的にはそういった特徴に合致しているが、三首おしなべて対偶表現がみられることからすれば、そういった技巧的表現にこそ、淵明の拘りがあったものと捉えられる。加えて、淵明の「詠二疏」詩における「放意樂餘年、遑恤身後慮」、「詠荆軻」詩の「心知去不帰、且有後世名」の一聯などは、『漢書』の二疏、『史記』における荆軻とは相違して、淵明自身の志向を彼らに代弁させているものであった。「詠三

良」詩については、曹植「三良」詩に色濃く影響を受けつつも、「臨穴罔惟疑、投義志攸希」の一聯は、従来の三良像とは相違して、「義」を貫くために積極的に死を選んだものとして表現されている。

以上のように「詠二疏」詩と「詠荆軻」詩において、正史とは相違して、淵明自身の志向が表現されているという点を捉え直してみると、歴史それ自体が淵明のものとして、淵明に内在化されていることを意味しているよう。淵明は、歴史人物を対象化し、自己の血肉と化した彼らに、主体的に成り変わって表現し得ているからこそ、淵明自身の志向がおのずと顕れて来るのである。従って、両作はあたかも淵明自身が歴史的世界を巡り、体験していくかのような態度で表現されているものと捉えられる。それと同様に、「詠三良」詩において淵明独自の三良が表現されているのは、三良に成り変わった淵明自身が君主から信頼を得て恩を授かった日々、そして、殉死そのものを体験することを通じて、淵明の「義」こそ身命を賭するものという志向が、呼び起こされたためと思うのである。またそれが、「詠三良」詩を表現していくなかで獲得された、淵明の新たな認識と看做されるのである。以上が淵明の伝体の詠史詩における特色である。

なお、先学がしばしば指摘する淵明の詠史詩と晋宋革命との関連については、作中に政界離脱の情や体制に対する報復心が暗示的に窺えるという点において、淵明の詠史詩製作の契機となり得るものと捉えているが、言及することが出来なかった。また、詠史詩における論体は、一人一事に拘らず、自己の抱負や憤懣が直接的に表現されているものであり、淵明の詠史詩においてその特徴に合致しているのが、「詠貧士」詩七首である。稿を新たに「詠貧士」詩に検討を加え、本稿で論じた伝体の詠史詩と比較していくことで、淵明の詠史詩における表現の特色を明らかにしたい。

*1 『義門読書記』（中華書局、一九八四年）

*2 班固「詠史」詩は、部分的には李善注などにもみられるが、纏まった形でみられるのは明の馮惟訥編纂の『古詩紀』（汲古書院、二〇〇五年）においてであり、該書に古典も明示されていないため、その出所自体が疑わしいものとして知られている。しかしながら作品それ自体の存在は、『詩品』序文に「東京二百載中、惟有班固詠史（東京二百載中、惟だ班固の詠史のみ有り）」とみることが出来、さらに吉川幸次郎氏が「班固の詠史詩について」において、比較的早い時期における五言詩であること、上記の一首に止まらない連作詩であったことを考証している（『書誌学論集 神田博士還暦記念』神田博士還暦記念会、一九五七年に所収、後に『吉川幸次郎全集』六卷・漢篇、筑摩書房、一九八四年に所収）。

*3 『漢書』刑法志には、「齊太倉令淳于公有罪当刑、詔獄逮繫長安。淳于公無男、有五女、当行会逮、罵其女曰、生子不生男、緩急非有益。其少女緹縈、自傷悲泣、乃随其父至長安、上書曰、妾父為吏、齊中皆称其廉平、今坐法当刑。妾傷夫死者不可復生、刑者不可復属、雖後欲改過自新、其道亡繇也。妾願没入為官婢、以贖父刑罪、使得自新。書奏天子、天子憐悲其意……（齊の太倉の令淳于公に罪有りて刑に当たると、詔獄逮して長安に繋ぐ。淳于公に男無く、五女有り、当に行きて逮に会わんとして、其の女を罵りて曰く、子を生みて男を生まず、緩急 益有るに非ず、と。其の少女の緹縈、自ら傷みて悲泣し、乃ち其の父に随いて長安に至る、上書して曰く、妾が父は吏と為り、齊中は皆な其の廉平を称す、今法に坐し刑に当たる。妾傷む。夫れ死する者は復た生くるべからず、刑せらるる者は復た属すべからず、後に過ちを改め自ら新たにせんと欲すと雖も、其の道は繇亡ぶなり。妾願わくは没入して官婢と為り、以て父の刑罪を贖いて、自ら新たにすることを得しめんことを、と。書 天子に奏す、天子 憐れみて其の意を悲しむ……）」とみえる。

*4 「漢魏の詠史詩——その成立と発展」（『論集』十六号、一九八二年）

*5 「左思と詠史詩」（『中国文学報』二十一号、一九六六年）

*6 『文選』の引用に当たって本文、及び李善注などは胡刻本『文選』（中華書局、一九七七年）を用い、五臣注の引用に当たっては、

『日本足利学校藏宋刊明州本六臣注文選』（人民文学出版社、二〇〇八年）を用いた。

*7『漢書』張湯傳に「功臣之世、唯有金氏・張氏、親近寵貴、比於外戚（功臣の世に、唯だ金氏・張氏のみ、親近寵貴し、外戚に比する有り）」とあり、また『漢書』金日磾伝に「金日磾夷狄亡国、羈虜漢庭、而以篤敬寤主、忠信自著、勒功上将、伝国後嗣、世名忠孝、七世内侍、何其盛也（金日磾は夷狄にして国を亡い、羈れて漢庭に虜たるも、篤敬を以て主を寤らしむ、忠信自ら著し、勒功もて将に上り、国を後嗣に伝えて、世に忠孝を名づく、七世内に侍りたること、何ぞ其の盛んなるか）」とみえる。

*8『漢書』馮唐伝に「武帝即位、求賢良、擧唐。唐時年九十餘、不能為官、乃以子遂為郎（武帝即位して、賢良を求むるに、唐を擧ぐ。唐時に年九十餘、官と為すこと能わず、乃ち子の遂を以て郎と為す）」とみえる。

*9 輿膳氏は前掲の「左思と詠史詩」において、たとえば酈炎の「見志」詩に「陳平敖里社、韓信釣河曲（陳平は里社に敖び、韓信は河曲に釣る）」（第一聯）とあるが、作品全体においては「彼らの事跡がテーマになっているわけで」はないこと、また阮籍の「詠懷」詩其六に「昔聞東陵瓜、近在青門外（昔は聞く東陵の瓜、近く青門の外に在り）」（第一聯）とあるのは、「阮籍の関心が邵平の物語自体にあるのではなく、この物語を通して彼の心情を述べる点にある」と説いている。

*10 王英志校点『袁枚全集』（江蘇古籍出版社、一九九三年）

*11 楊潔瓊・許華偉氏ら編纂の『詠史詩精華』（京華出版社、二〇〇二年）「前言」に拠る。

*12 沈德潜『古詩源』（中華書局、一九六三年）

*13 王氣中箋注『芸概箋注』（貴州人民出版社、一九八六年）

*14『宋書』顔延年伝に「延之」謂湛曰、吾名器不升、当由作卿家吏。湛深恨焉、言於彭城王義康、出為永嘉太守。延之甚怨憤、乃作「五君詠」以述竹林七賢（「延之」湛に謂いて曰く、吾が名器の升らざるは、当に卿の家吏と作るに由るべし。湛深く恨みて、彭城王の義康に言いて、出だして永嘉太守と為さしむ。延之甚だ怨憤し、乃ち「五君詠」を作りて以て竹林七賢を述ぶ）」とみえる。

*15 前掲の『詠史詩精華』「前言」に拠る。

*の底本には陶澍『靖節先生集』（四部備要本）を用いることとし、必要に応じて諸版を参照することとした。

*1『文鏡秘府論』南卷には「詠史者、誦史見古人成敗、感而作之（詠史とは、史を読み古人の成敗を見て、感じて之を作る）」（『文鏡秘府論校注』中国社会科学出版社、一九八三年）とある。

*2「飲酒」詩其二では、「積善云有報、夷叔在西山。善惡苟不応、何事立空言。九十行帶索、飢寒況當年。不頼固窮節、百世當誰伝（積善 報い有りと言ふ、夷叔 西山に在り。善惡 苟しくも応ぜずんば、何事ぞ 空言を立てし。九十にして行きて索を帯にし、飢寒 當年に況うるも、固窮の節に頼らざんば、百世 當に誰か伝うべけん）」とうたわれているように、「善」を「積」み行つてきた 伯夷・叔斉が、相應の待遇を受け得なかつたことに疑義を投げ掛けており、「擬古」詩其二では、「辞家夙嚴駕、當往至無終。問君 今何行、非商復非戎。聞有田子泰、節義為士雄。斯人久已死、郷里習其風。生有高世名、既没伝無窮。不学狂馳子、直在百年中（家を辞して夙に駕を嚴え、當に往きて無終に至るべし。君に問う 今何にか行く、商に非ず 復た戎にも非ざるに。聞く 田子泰なるもの有り、節義 士の雄たり。斯の人 久しく已に死せるも、郷里 其の風に習うと。生きては世に高き名有り、既に没しては無窮に伝わる。学ばざるかな 狂馳の子、直だ百年の中に在るのみなるを）」とうたわれるように、田疇、字は子泰の「節義」を称え、その精神のあり方が郷里の人々に継承されていることをうたっている。

*3参考までに前掲の楊潔瓊・許華偉氏らの「詠史」の定義を挙げておく。

以歴史為題材的詩歌、有很多種名稱、諸如「述古」「懷古」「覽古」「感古」「古興」「誦史」「詠史」等、有的還直接以被歌詠的歷史人物・歷史事件為標題。這些詩歌都具有一個共同的特徵、即都是以歷史作為詩人感情的載體、史・情是緊密結合的。因此我們以為、它們都屬於広義詠史詩的範疇。如果給詠史詩下個定義的話、那麼凡是對歷史人物・歷史事件・歷史遺跡進行叙述・評價・憑弔或借國家興亡寄托個人懷抱的詩歌、都可以称作詠史詩（歴史を題材とする詩歌には、多様な詩題があり、たとえば「述古」「懷古」「覽古」「感古」「古興」「誦史」「詠史」などであり、あるものは直接的に詠じる対象の歴史人物・歴史事件を詩題としている。これらの詩歌は全て一つの共通の特徴を備えており、それはみな歴史を詩人の感情を伝達する手段とし、

歴史と感情が緊密に結び付いているという点である。このように考えてみると歴史を題材とする詩歌であれば、広義にはおしなべて詠史詩の範疇に属しているものと看做される。もし詠史詩を定義付けるならば、およそ歴史人物・歴史事件・歴史遺跡に対して叙述・評価・憑弔、あるいは国家の興亡にかこつけて個人の志を托しているものであり、それらはみな詠史詩と称することができる。

*20 近年における研究として、井上一之氏の「陶淵明『詠二疏詩』について——知足の是非——」（『中国詩文論叢』二四号、二〇〇五年）や、大立智砂子氏の「陶淵明の仮託詩における一人称表現——詠史詩および「形影神」を中心として」（『中国文学研究』三三号、二〇〇七年）などがある。

*21 前掲井上氏の「陶淵明『詠二疏詩』について——知足の是非——」に拠る。

*22 『芸文類聚』（上海古籍出版社、一九八二年）巻五十五・雜文部・史伝にみられる。なお、詩題については遼欽立氏『先秦漢魏晉南北朝詩』魏詩に拠った。

*23 淵明「詠荊軻」詩の「心知去不帰、且有後世名」の出句、「去不帰」については荊軻が易水のほとりにおいて、「壮士一去兮不復還（壮士一たび去りて復た還らず）」とうたったのを踏まえていようが、厳密に言えば、そもその荊軻にあつては、生きて帰することを固く誓っており、それは荊軻が太子丹に次のように述べている点から窺える。

何太子之遣。往而不返者、豎子也。且提一匕首入不測之彊秦、僕所以留者、待吾客与俱。今太子遲之、請辞決矣（何ぞや太子の遣わすとは。往きて返らざる者は、豎子なり。且つ一匕首を提げて不測の彊秦に入る、僕の留まる所以は、吾が客を待ちて与に俱にせんとすればなり。今太子之を遅しとす、請う辞決せん）。

荊軻は、死地に活路を開くために友を待ち、旅の仕度を整えていた。そうであるにも拘わらず、丹は荊軻に立立を急かし、かくして荊軻は活路を絶たれてしまった。また荊軻は暗殺失敗後においても、「事所以不成者、以欲生劫之、必得約契以報太子也（事の成らざる所以は、生きながら之を劫かし、必ず約契を得て以て太子に報ぜんと欲するを以てなり）」というように、嬴政を生きながら脅しつけ、それを丹に報告しようとしている。荊軻にとって、丹の意に背くことなく、それでいて自己の活路を開くには、嬴

政を殺さずに脅しつけるに止めるしか、残されていなかったのである。

*24 「六朝における律詩の形成」(『日本中国学会報』四号、一九五二年に所収、後に『六朝唐詩論考』創文社、一九九九年に所収)
 *25 『全漢三国晋南北朝詩』(芸文印書館、一九六八年)第一冊の「緒言」に拠る。

*26 井上一之氏「陶淵明『詠三良詩』について——忠と済民」(『中国詩文論叢』二五号、二〇〇六年)を参照。

*27 元劉履『撰詩補注』卷五、明黄文煥『陶詩折義』卷四、清陶澍『靖節先生集』卷四などを参照。

*28 淵明「詠三良」詩における王粲「詠史」詩や曹植「三良」詩の影響については、注釈三三に引用した袁行霈氏『陶淵明箋注』(中華書局、二〇〇三年)を参照。

*29 矢田博士氏「曹植『三良詩』考——『文帝誄』との関連を中心として」(『中国文学研究』十九号、一九九三年)に詳細な検討がみられる。

*30 于光華『重訂文選集評』(国家図書館出版社、二〇一二年)巻五に拠る。

*31 前掲の矢田氏「曹植『三良詩』考——『文帝誄』との関連を中心として」に拠る。

*32 本稿で挙げた三良の事例については、楊伯峻『春秋左傳注』文公六年の注を参照とした。楊氏は本稿で挙げた三良の例のほか、『毛詩』鄭箋の「從死、自殺以從死(從死は、三良自ら殺して以て死に從う)」を挙げて、「先秦皆謂三良被殺。自殺之說、或起於漢人(先秦皆な三良の殺さるるを謂う。自殺の說、或いは漢人より起こる)」(中華書局、一九八三年)と述べている。

*33 「忠情謬獲露、遂為君所私」における「謬」字については、二様の解釈が提示されており、一つは謙讓の意味で解するもので、もう一つは、誤りと解するものである。遼欽立氏は「謬、妄。自謙語也」(『陶淵明集』中華書局、一九七九年)と述べている。また王叔岷氏は当該一聯に対して、「癸卯歲十二月中作与從弟敬遠」詩の「高操非所攀、謬得固窮節(高操は攀ずる所に非ざるも、謬りて固窮節を得たり)」(第十五・十六句)を引用して、「陶公於己、則謙言『高操非所攀、但謬得固窮之節』而已。實則得固窮節、正是高操也(陶公は自己にあつては、謙遜して、『高操は攀ずる所に非ざるも、ただ謬りて固窮の節を得る』のみ、という。実は固窮の節を得るといふことは、すなわち高操であることをいっている)」(『陶淵明詩箋証稿』芸文印書館、一九七五年)と述べて

いることからすれば、王氏も謙讓の意味で捉えているのであろう。日本では鈴木虎雄氏『陶靖節詩解』（東洋文庫、一九九一年）、一海知義氏『陶淵明』（筑摩書房、一九六八年）、田部井文雄・上田武氏『陶淵明全釈』（明治書院、二〇〇一年）などが謙讓の意で解している。一方で袁行霈氏は前掲『陶淵明箋注』の「詠三良」詩の「折義」において、「厚恩固難忘、君命難違、一旦君主長逝、遂以身殉之。而言外之意、反不如不乘通津、不恐功微、明哲以保身也。『忠情謬獲露、遂為君所私。』一「謬」字最可深味（厚恩はもとより忘れ難く、君命は背き難いもので、ひとたび君主が逝去して、遂に身を以て穆公に殉じた。しかし言外の意としては、却って通津に乗るべきでないし、功微であることを恐れるべきではないのであって、明哲は保身を重視するのである。『忠情謬りて露わるるを獲、遂に君の私する所と為る』の「謬」字は最も味わい深いものがある）」と説いて、逆説的に読むことを指摘する。また「忠情謬獲露、遂為君所私」に対しては、「曹植有『三良詩』一首、曰、『秦穆先下世、三臣皆自殘』王粲『詠史』一首亦詠三良、曰、『秦穆殺三良、惜哉空爾為』説法不同、立意亦異。淵明此詩兩方面兼顧、合情合理、最能體三良心情（曹植『三良詩』の一首では、『秦穆先下世して、三臣皆な自ら残う』という。王粲『詠史』の一首もまた詠三良を対象として、『秦穆三良を殺す、惜しいかな空しく爾為せり』という。彼らのいい方は同じではなく、着想もまた異なっている。淵明はこの詩の両方面を兼ね備えており、情理に合して、最も能く三良の心情に理會している）」と述べているように、淵明「詠三良」詩は、曹植「三良」詩における「自殘」と、王粲「詠史」詩における穆公批判の両方を兼ね備えていることを説いている。このことからすれば、袁氏は「謬」字の意味を誤りの方向で解しているのであろう。このような観点からの継承関係の立論も興味深いが、本稿では、「謬」字については、ひとまず先に挙げた諸本と同じように謙讓の意味で捉えることとする。

*34 「建安期の曹植の詩について」（『名古屋女子大学紀要』三六号、一九九〇年）

*35 前者の曹植を視点人物として捉えるのは、伊藤正文氏『曹植』（岩波書店、中国詩人選集三、一九五八年）、内田泉之助・網祐次・中島千秋氏『文選』（明治書院、新釈漢文大系十四、一九六三年）など、後者の三良視点から捉えるのは、斯波六郎・花房英樹氏『文選』（筑摩書房、世界文学大系七十、一九六三年）などである。

*36 前掲大立氏は「陶淵明の仮託詩における一人称表現——詠史詩および『形影神』を中心として」において、第二句「但懼時我遺」

で、「作中人物『三良』の視点から」うたい起こされ、第二十句「泫然霑我衣」において、その視点は「陶淵明自身に選っている」ことを指摘している。

(筑波大学大学院人文社会科学研究所博士課程)